

日本海沿岸における縄文時代のサメ類利用の総合的研究（平成 29 年度）

中沢道彦・町田賢一・納屋内高史（日本海貝塚文化研究会）

1 はじめに

本研究は平成 27 年度～平成 29 年度において日本海学研究グループ支援事業の支援を受け、日本海沿岸における縄文時代サメ類利用の実態を解明する総合的な研究を行った。

縄文時代においてサメ類は食用として漁撈対象物ではあるが、サメは獰猛で、獲得の漁撈活動には危険が伴うため、捕獲者は漁撈集団の中でも階層としての地位の高さが見通される。また、サメの歯や椎骨を加工した装身具は、サメ漁撈の危険性やサメの強さから一定の価値をもったものと考えられるが、日本海沿岸遺跡のみならず、例えば長野県宮崎遺跡などでも出土し、日本海側の価値を内陸側もその価値を共有したと考えられる。かつ最近、長野県宝に指定された長野県山ノ神遺跡縄文晩期シュモクザメ絵画土器の製作背景も日本海側の価値を内陸側が認め、独自に展開したものと評価できる。

縄文時代の日本海沿岸のサメ類利用の研究は、食料獲得の生業研究のみならず、獲得の危険性からサメ製装身具に価値を認める社会があったということで当時の社会組織を考える研究、また内陸部出土サメ関係遺物から日本海側の価値を内陸部でも受け入れたという交流実態解明の研究へと展開を志向し、3つの方向性と目的をもち、研究を進めた。

- ①日本海沿岸の貝塚を中心に縄文遺跡出土のサメ類の動物遺存体の資料集成を行い、データベースを作成する。
- ②日本海岸及び隣接する内陸部の縄文時代遺跡から出土するサメ類の歯や椎骨を加工したサメ製装身具の集成、型式学検討、出土状況の検討を行う。
- ③縄文時代晩期後半のシュモクザメ絵画土器が出土した内陸部の長野県山ノ神遺跡出土土器や装身具などを再整理する。

2 サメ類出土動物遺存体などのデータ集成と動物遺存体分析

平成 29 年度は前年に引き続き、富山県の縄文時代から中世、近世の動物遺存体データを集成した。また、平成 27～29 年度においては、富山県富山市小竹貝塚、同市北代貝塚、朝日町境A遺跡、射水市南太閤山遺跡、氷見市大境エンニヤマ下洞窟、上久津呂中屋遺跡、石川県金沢市新保本町チカモリ遺跡、新潟県糸魚川市長ヶ原遺跡の遺存体調査を行った。また、比較資料として岡山県岡山市彦崎貝塚、長野県北相木村栃原岩陰遺跡、長野県長野市宮崎遺跡、長野県同市大清水遺跡出土動物遺存体の調査を行い、大清水遺跡の分析データを公表した（納屋内・中沢 2018）。



第1図 上久津呂中屋遺跡 不明サメ類歯



第2図 上久津呂中屋遺跡 イタチザメ歯

3 サメ製装身具の研究

平成 29 年度は、前年に引き続き日本海岸及び隣接する内陸部の縄文時代遺跡から出土するサメ類の歯や椎骨を加工したサメ製装身具を集成するとともに、型式学検討、出土状況の検討を行うことで、当時の日本海産サメ装身具の価値の高さを検証した。引き続き、人と装身具との関係性が分析できる、サメ製装身具やサメ類歯などが副葬品として墓坑出土や人骨装着のデータに着目し、貝輪が多数装着されるなど他と区別される人骨に装着されたサメ製装身具の分析を行うとともに、集成、分析作業から派生したサメ製装身具の出現と終了時期の問題、年代測定検証、資料抽出手法などを調査・分析を行った。

(1) 福岡県芦屋町山鹿貝塚について

福岡県芦屋町山鹿貝塚の現地調査及び出土資料の調査を行った。

山鹿貝塚は縄文早期～晩期にわたる貝塚で遠賀川河口に近い響灘に面した砂丘上に立地する。現存する遺跡の範囲は東西約 150m、南北約 60m で、標高約 15m となる。

時期は縄文時代早期～晩期に及ぶ。1968 年など 4 次にわたりに調査が実施され、縄文時代の埋葬人骨が 18 体出土した。うち、砂層から縄文後期鐘ヶ崎式を伴い、若年成人女性の 2 号人骨は頭骨付近に左右 1 点ずつのサメ歯製耳飾を装着し、ベンケイガイ製貝輪を右腕に 5 点、左腕に同 14 点、胸部に硬玉大珠及び鹿角製垂飾を装着する。2 号人骨は女性の 3 号人骨と並列し、かつその間に乳児の 4 号人骨を挟む。3 号人骨も右腕に 11 点、左腕に 15 点の貝輪を装着する。また、ベンケイガイ製貝輪を 15 点装着した成人女性の 16 号人骨の頭骨右からサメ製耳飾、左猪牙製耳飾が出土している。

2 号人骨、16 号人骨とも貝輪を 10 点以上身に着け、サメ製耳飾を装着する。いずれも女性である。何らかの地位の高さがあったのか、特別な呪術的な意味があったのか、生前から多数の貝輪を装着した可能性があり、特殊な立場の者がサメ椎骨製耳飾を装着していることで、サメ歯製耳飾に一定の価値があったことを示す事例である。山鹿貝塚のみでみるとサメ歯製耳飾装着は女性に偏るが、第 1 表のとおり日本列島で確認するかぎり、現状でサメ歯製・サメ椎骨耳飾、サメ歯製垂飾、サメ骨製小玉（首飾）などで明確に男女の性差による嗜好の傾向を指摘することはできなかった。



第 3 図 福岡県山鹿貝塚現地



第 4 図 山鹿貝塚人骨埋葬復元

(2) 日本列島におけるサメ製装身具の利用開始について

資料集成した縄文時代のサメ歯製なり、サメ椎骨製装身具のデータからその利用開始時期を検討した。縄文草創期のサメ製装身具の存在は判然としないが、縄文早期の可能性のある資料として、瀬戸内愛媛県上黒岩岩陰遺跡では縄文早期中葉黄島式が主体となる 4 層出土のサメ・エイ類椎骨製小玉（首飾）、中部高地の長野県栃原岩陰遺跡では早期初頭表裏縄文土器出土レベルからアオザメ歯製垂飾未製品、長野県湯倉洞穴遺跡では縄文早期中葉押型土器を主体とするⅨ層からメジロザメ歯製垂飾が出土する。関東では埼玉県妙音寺岩陰遺跡で縄文早期中葉沈線土器を主体とする層からイタチザメ歯製垂飾が出土する。出土状況については、上黒岩岩陰遺跡 4 層は若干縄文前期の遺物を含み、栃原岩陰遺跡は層でなく、レベルによる状況、湯倉洞穴遺跡例は同層出土の人骨との関係性が判然としないなどの検討課題をもつが、土器編年から表裏縄文土器群が押型土器群、沈線土器群より古いため、現状では内陸部の栃原岩陰遺跡のアオザメ歯製垂飾未製品がサメ製装身具としては日本列島で古い可能性がある。現状で日本海側において縄文早期のサメ製装身具の存在は判然としないが、今後、縄文早期のサメ製装身具の出土が見込まれると考えられる。

第1表 縄文時代における人骨共伴や墓壙出土のサメ類製品等の出土事例（未完成）

番号	都道府県	市町村	遺跡名	時期		遺構	人骨				副葬品	サメ歯・製品の出土状況	文献
				大別	型式		人骨	性別	年齢	属性			
1	北海道	函館市 (旧南茅部町)	ハマナス野遺跡	前期 中葉	円筒下層b式	第15号墳墓底部	なし				ホオジロザメの未穿孔歯3点	底部	
2	北海道	木古内町	札苅遺跡	晩期	大洞C2式	69号土墳墓底部					メジロザメ属未穿孔歯1点	底部	
3	北海道	苫小牧市	美沢1遺跡	後期 末	堂林式	JX-3 墓壙P-106	なし				土器、叩石、赤漆塗弓2本、サメの歯多数		
				晩期 初頭		大洞B式	土墳墓 (P-81)	頭骨のみ			メジロザメ属歯5点、漆製櫛1点	頭骨額からサメの歯、顎から櫛	
4	北海道	千歳市	美々4遺跡	晩期 初頭	大洞B式	盛土墳墓 (M-3)	4体以上の 人骨				メジロザメ属歯2点、小玉68点、土器、石鏃4点、石斧1点		
				晩期 初頭		土墳墓 (P-66)	頭骨			メジロザメ属歯9～12点、フレイク2点、玉2点	サメの歯は頭骨の首のあたり		
				晩期 初頭		土墳墓 (P-67)	人の歯 (2体合葬)			メジロザメ属歯11点、漆製櫛2点、石斧1点、玉1点、石鏃1点	サメの歯は2ブロックから出土		
				晩期 初頭		土墳墓 (X205)	なし			メジロザメ属歯2点、勾玉1点			
				晩期 初頭		土墳墓 (P376)	遺体は糊状に腐食、歯残存			アオザメ左側下顎歯1点、石棒、玉38点、石棒1、土製耳飾1			
				晩期 初頭		土墳墓 (P385)	なし			ホオジロザメ下顎歯1点、石鏃1、石鏃3、石斧3、叩石6			
5	北海道	恵庭市	柏木B遺跡	後期末	堂林式	土墳墓 (1106号)	なし				サメ歯、丸玉30	サメの歯は丸玉に近接して出土	
				後期末		土墳墓 (436号)	2体分以上の 人骨			サメ歯、石鏃1、櫛漆器2	サメ歯は櫛用漆器に接して出土		
6	北海道	石狩市	志美第4遺跡	晩期 中葉	大洞C2式	第17号墓					アオザメ作用歯・補充歯111点 土器、平玉4、勾玉1		
						第24号墓	1体分				メジロザメ属歯108 (1個体分) 石斧2、ドリル1、石鏃51点、 飾弓2、漆器片5		
						第27号墓					アオザメ離歯36、剥片、漆器、 勾玉1、丸玉1		
						第36号墓					アオザメ離歯17、		
7	北海道	新ひだか町 (旧静内町)	御殿山遺跡	後期末～ 晩期初頭	御殿山式	第7号墳					サメ歯7点	遺体との関係 不明	
						B11号ビット					サメ歯1点、石鏃2点、鏃2点、石 匙2点、アスファルト入り土器		
						C14号ビット					サメ歯15点		
						D1号ビット							
8	北海道	釧路市	緑ヶ岡遺跡	晩期末	ヌサマイ式	土墳墓				サメ歯1点 (ホオジロザメもしくはメジロザメ属の一種?)			
9	北海道	弟子屈町	屈斜路 コタン遺跡	早期末	東釧路IV式	土墳墓				サメ歯 (ホオジロザメ)	時期要検討		
10	北海道	斜里町	朱円栗沢遺跡	後期末	栗沢式	A号土籠2号墳				サメ歯3、石棒1、漆器4、玉 6、石鏃1			
11	秋田県	横手市	平鹿遺跡	晩期	大洞C1式	SK87	なし				ホオジロザメ製垂飾	覆土中部	
12	新潟県	佐渡市	堂の貝塚	中期前葉	新保・新崎式		6号人骨	男	壮年～熟年	齧歯1本	イタチザメ歯製垂飾、石鏃13点		
13	長野県	長野市	宮崎遺跡	晩期	御経塚式？ 佐野II式？	5号土墳	5号人骨	男	壮年～熟年	上顎犬歯 下顎犬歯 第一小白歯 抜歯	サメ椎骨製耳飾 (赤色塗彩)	頭骨右側	
14	長野県	高山村	湯倉洞穴	早期	押型文土器	IX層	早期人骨	女性	壮年		メジロザメ歯製垂飾1、中型獣 四肢骨製管玉2	確認中	
15	静岡県	袋井市	大畑遺跡	後期		1977年 5号人骨	5号人骨		幼児		椎骨製垂飾 (「ドチザメ」軟骨 魚類18)		
16	愛知県	田原市	川地貝塚	後期		SK02		女	熟年		椎骨製垂飾 (サメ椎骨製18、タ ヌキ椎骨製5、ウサギ椎骨製)		
17	愛知県	田原市 (旧渡来町)	伊川津貝塚	晩期			1922年 16号人骨				サメ椎骨製耳飾左右1 (赤色顔 料塗布)		
18	岡山県	岡山市 (旧瀬崎町)	彦崎貝塚	中期	船元IV式	散乱骨	瀬崎町調査 1号人骨	男	壮年後半～ 熟年前半		エイの椎骨製垂飾1	共伴不明	
				中期 初頭	船元I式	土膚	瀬崎町調査 2号人骨	不明	子供		エイの椎骨製垂飾2、サルボウ 製貝輪片 (共伴不明)		
				中期 初頭	船元I式	土膚 (3号人骨と合葬)	瀬崎町調査 4号人骨	女	壮年後半～ 熟年前半	経産婦	エイの椎骨製垂飾2、サヌカイト 剥片		
19	広島県	庄原市	隔内遺跡	中期	船元III式～ 船元IV式	土膚 (SK4から 流出?)	—	—	—	—	メジロザメ科椎骨耳栓 (耳飾) 2		
20	福岡県	芦屋町	山鹿貝塚	後期 中葉	鐘崎式		2号人骨	女	成年 (20歳位)	抜歯無し	サメ製耳飾2、緑色大珠1、鹿 角2、ペンケイガイ製貝輪19		
				鐘崎式		16号人骨	女	成年	抜歯無し	サメ製耳飾 (右) 猪牙製耳飾 (左) ペンケイガイ製腕輪15			
21	福岡県	宗像市	鐘崎貝塚	後期中葉	鐘崎式						人骨にサメ歯製耳飾着装		詳細不明
22	沖縄県	宜野湾市	善友名山川原 第5遺跡	後晩期		15号墓					貝製サメ歯状模造品2 有孔貝製品		

(3) 長野県宮崎遺跡サメ椎骨製耳飾装着第5号人骨の年代

比較資料として長野県長野市宮崎遺跡出土5号人骨の年代測定を行った。

宮崎遺跡は保科扇状地上に立地、縄文時代中期前半～晩期末の長期継続型遺跡である。同遺跡3号、4号、5号、6号土壙墓は新旧が不明だが、切り合いの中で土壙墓がつくられた。うち、5号土壙墓出土の5号人骨では頭骨右耳にサメ椎骨製耳飾が装着された状態で出土している。サメ椎骨製耳飾は赤色塗彩されている。サメはメジロザメ科の可能性が高いことが判明している。これまで3号～6号土壙墓が検出された区域から縄文晩期後葉土器が多く出土し、概ね当該時期の土壙墓と推定されていたが、明確な時期は不明であった。今回、サメ椎骨製耳飾が装着された5号人骨を試料としてAMS放射性年代測定を行い、2524±23BP（未校正）の数値が得られた。正式報告は別途行うが、概ね中部高地の縄文晩期末土器型式である氷Ⅰ式相当の年代となり、サメ椎骨製耳飾もほぼ同時期のものであることが判明した。これまで、縄文晩期後葉における装身具が判然としない点もあったが、今回の年代測定の結果、その一端が明らかになった。



第5図 宮崎遺跡サメ椎骨製耳飾



第6図 宮崎遺跡 3号・4号・5号人骨出土状況

4 北陸貝塚研究会の設立と同会における研究発表

91体の縄文前期人骨が出土した富山県小竹貝塚、国内最古の柄付ヤリガンナが出土した石川県小松市八日市地方遺跡に代表される従来の知見を覆す北陸の最近の調査成果などを踏まえ、北陸の考古学を再検討する機運が高まる中で町田賢一は北陸貝塚研究会を設立（代表：町田賢一）、平成29年12月10日に第1回、平成30年2月12日に第2回北陸考古学研究会が富山県富山市のとやま市民交流館で開催された。

第1回研究会では町田賢一が「北陸地方の貝塚を考える」、中沢道彦が「縄文時代のサメ類利用について―日本海沿岸を中心に―」について発表し、本助成事業の成果を発表した。



第7図 北陸貝塚研究会

[図版出典]

第1図、第2図 納屋内高史撮影 第3図～第5図 中沢道彦撮影（芦屋町教育委員会所蔵、長野市教育委員会所蔵）
第6図 矢口他 1988 を中沢改変 第7図 町田賢一提供 第1表 中沢道彦作成

[主要参考引用文献]

中沢道彦 2002 「サメかサケか—飯山市山ノ神遺跡出土魚形線刻面土器をめぐって—」『佐久考古通信』No.84 4-7頁 佐久考古学会
藤田富士夫 1998 『縄文再発見』 大巧社
矢口忠良・青木和明・鶴田典昭・西沢寿晃・和田博 1988 『長野市の埋蔵文化財第28集 宮崎遺跡—長原地区団体営土地改良総合整備事業に伴う発掘調査報告書—』長野市教育委員会 川田土地改良区

[平成29年度研究実績]

中沢道彦 2017 「長期継続型遺跡における初期農耕の導入の一事例—新潟県上越市和泉A遺跡・籠峰遺跡—」『山本暉久先生古稀記念論文集 21世紀考古学の現在』 89-98頁 六一書房
那須浩郎・中沢道彦 2017 「小佐原遺跡出土の植物遺体について」『奥信濃文化』第29号 14-19頁 飯山市ふるさと館友の会 10月
中沢道彦 2017.12.10 第1回北陸貝塚研究会発表「縄文時代のサメ類利用について—日本海沿岸を中心に—」北陸貝塚研究会 12月 富山市民交流館
納屋内高史 2018 「小竹貝塚における集落変遷の再検討—貝層と墓域の変遷を中心として—」『富山市考古資料館紀要』第37号 26-36頁 富山市考古資料館
納屋内高史・中沢道彦 2018 「長野市大清水遺跡出土の動物遺存体の再検討」『長野市立博物館研究紀要』長野市立博物館
町田賢一 2017.12.10 第1回北陸貝塚研究会発表「北陸地方の貝塚のいま」北陸貝塚研究会 12月 富山市民交流館
町田賢一 2017 「土器圧痕から見た縄文前期」『平成28年度 埋蔵文化財年報』 10-17頁 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 5月